摂津のまちの好人物は文学教師、詩人である

佐相　憲一

文学研究者、そして、縁の下の力持ち

岸本嘉名男さんというと、即座にいくつかのイメージがわいてくる。

まずは、学問の研究家であり、先生のイメージである。いつも謙虚な姿勢の岸本さんだが、もともと英米文学研究を続けてきた人で、関西の学生たちにわかりやすくワーズワースなどの詩の魅力を伝えてきた。英米文学好きは同時に自らの文化的ルーツである日本文学への造詣とも共存し、しばしば世界的な視野の詩文学研究につながっているようだ。萩原朔太郎の研究を発表したりもしてきた。高校、大学で若い人たちに文学の魅力を伝えてきた岸本さんは、詩文学の研究を狭い専門家の中だけの難解なものから、意欲ある意識的な大衆、特に若い人たちの中に解放するという功績をもつ人なのである。いかにも大阪の好好爺といった風貌の胡麻塩頭の眼鏡の奥を覗いてみるがいい。そこには、人間の生きた声をうたう世界文学を若い人に誠実に伝えて来た、味のある研究者の威厳が見えてくるだろう。

たくさんある研究の中から、本詩選集には三つの評論が再掲されている。『『詩の音律』考」は、ともすると日本の現代詩が失いかけている詩の重要な側面を世界文学的な視野でわかりやすく論じていて、特におすすめだ。詩における音律の側面に注目させてくれる格好の入門編というだけでなく、現代詩にどっぷりつかった私たち詩の世界の人間にとっても新鮮な提起と言えよう。随筆の味をもつざっくばらんな出だしの分析が意表をついて心にくいので、ここに引用してみる。

朝日新聞『天声人語』（昭和五十七年七月二十二日付）で、珍しい散文に出会った。それは、「ヒマワリの花が雨に打たれ、しおたれている姿はさびしい。ヒマワリはやはり、夏の強烈な日差しを浴びて、堂々と咲いているところがいい。」という部分である。これを読んだ時、この筆者は「詩ごころ」の分かっている人だな、と直観した。二行の行頭に「ヒマワリ」という同音同綴同意の片仮名をすえ、しかも行尾には、「さびしい」、「いい」と脚韻してあり、しかも行中の三カ所にわたる「し」音（・印部分）の繰り返しが躍動して見事である。もちろんこの散文が伝える内容は容易であり、詩ともちがう趣きを呈するわけであるが、しかしこれを音読した際の調子の良さは、二行詩に近いものと言わざるを得ないのである。

（『『詩の音律』考」より）

的確で意外な分析だ。「分析せんでええ、おっさん、ビョウキやで」と、思わず大阪人風にツッコミを入れて称えたくなるのは、私が十年以上も関西に暮らした大阪びいきだからだけではない。何気ない新聞の散文に〈詩〉を感じてしまうほど、著者が常日頃から詩を愛していること、そこに感動するからである。

論考では、イエイツ、ヴェルレーヌ、ボードレール、北原白秋、室生犀星、小林一茶、若山牧水、と岸本先生の熱心で説得力のある音律論がわかりやすく展開されている。この人は他者の詩を読む時にいつも胸の中で朗読しているんだな、言葉を活字だけでなく発声音でもとらえているんだな、と感じさせる感受性の持ち主である。

ところで、戦後現代詩において小野十三郎は、侵略戦争に加担したかつての絶対的天皇制国家的な紋切り型の「奴隷の韻律」を厳しく批判したが、詩における音律には「内在律」という独自のものもあって、小野十三郎の詩も独特の内在律をもっていた。岸本先生の論はそんなことも想起させてくれながら、世界文学における詩本来の魅力のひとつである音律という側面にあらためて焦点を当てて、読者の詩愛好心を解放してくれるようだ。

本文にあるように、イエイツの「イニスフリー湖島」が岸本さんの〈愛唱詩〉だ。自然を愛する岸本さんらしい。ちなみに、同じく本文に出てくるボードレールの

「夕の諧調」は私の愛読詩でもある。辞書を引き引き、ラジオ・フランス語講座を聴いた独学の徒であった私は、フランス俳優が朗読したボードレールのCDを買ってきて、その美しい音律と哀歓ある鮮明なイマージュに魅せられたものだ。だから、岸本先生がここで言っていることはいっそうよくわかる。発声してみると「詩っていいな」と感じる。この『『詩の音律』考」を初めて読まれる広範な読者諸氏が、これをきっかけにあらためて世界詩文学の魅力に興味を持たれることを願うものである。

岸本嘉名男さんのイメージはほかにもあって、詩団体運営の「縁の下の力持ち」の存在感である。彼は人懐っこい調子で熱心に出かけていっては、関西におけるさまざまな詩のイベントなどに参加し、協力し、支えてきた。最近では関西詩人協会の運営委員として、大阪市立中央図書館での詩画展成功などのために奔走してきた。連絡をまめにとり、早くから段取りを決めて人びとに相談し、みんなのために尽力する誠実な人である。私も大阪時代に運営委員を二期六年務めさせていただいたが、詩運動というものは、自分や同人誌仲間のことしか考えない排他的打算や狭い芸術観だけでは絶対に前進しないものである。日本のように表立ったジャーナリズムや流通・出版業界が自由詩の世界を疎外している国において、詩文学の市民への普及や多彩な交流活動の展開は、多くはボランティアの詩愛好家や詩人の尽力に負っている。関西詩人協会（初代代表は故・杉山平一氏、現在は有馬敲氏が代表、事務局長は横田英子氏）の運営委員は三〇〇名以上の会員による選挙で選ばれるのだが、なぜ人びとが岸本さんに期待するのかがよくわかる。それもすべて、この人が心底、詩が好きだということによるのだろう。そして、さまざまな草の根の詩人たちの作品がもっと世に紹介されてほしいという願いにもよるのだろう。さまざまな困難に、「いやあ、かなわんなあ」などと頭をかきながら、尽力する岸本さんの姿が浮かぶ。

日常、自然、人生を見つめて

そんな岸本嘉名男さんは、ご自分の詩作では、いたって平易な語りを好む。題材としては、日常の風景や感慨が多く、旅の詩もかなりある。英米文学研究家の岸本先生や詩団体の世話をする岸本運営委員は、素朴で親しみやすい人生詩を書く岸本さんなのである。

大阪の池田や摂津、枚方、兵庫の西宮など、暮らしたり働いたりしてきた関西の風景の中で語られる。

さっそく一篇、全文を引用しよう。二〇〇〇年刊行の詩集『碧空』の中の詩「大寒」である。

大　寒

雨がしとしと
じーんと冷える
大寒にみなふるえ
心の扉も閉じたまま
おりから校庭の
スイセンの群れが
けなげにも
薄白い花をなびかせ
ワーズワースの詩句ほどではないが
なごませてくれるのは有り難い
マスクで表情こそ見えないが
じっと見つめている君
笑顔を続けていよ

学校生活の何気ないひとコマだが、読むほどに味が出てくる詩だ。

〈大寒にみなふるえ／心の扉も閉じたまま〉の雨の校庭は、時代の精神状態をも連想させる。激動の現代社会で若い人たちと教育の場で接してきた岸本さんならではである。そんな中でふと視点は〈校庭の／スイセンの群れが〉〈けなげにも／薄白い花をなびかせ〉ている様子に移る。それは愛すべき生徒たちのようではないか。英米文学好きの岸本先生は思わず、〈ワーズワースの詩句ほどではないが／なごませてくれるのは有り難い〉と綴り、自然の優しさに感謝するのである。ここにも生徒たちへの眼差しがダブって読める。続いての終三行がこの詩を飛躍させ、感動させる。〈マスクで表情こそ見えな

いが／じっと見つめている君／笑顔を続けていよ〉。突然の〈君〉の登場にも読者は面食らうことはない。なぜなら、すでに詩の前半で読者の胸には校庭の自然風景と共に〈大寒にみなふるえ／心の扉も閉じたまま〉のイメージがあり、学校という生徒と先生の場が共有されており、〈スイセン〉が暗示するものもそことリンクしているからである。〈マスク〉をしているということは、風邪をひいているか喘息か、あるいはなにかほかの原因で、健康体ではないしんどい状態だということだ。しんどいのだが欠席するほどへたばってはいない、微妙な状態で頑張っている生徒。その生徒はスイセンの花を〈じっと見つめている〉のである。同じものを見ている教師は眼をマスクの生徒に移し、そっと励ましの言葉を送るのだ。おそらくは無言で、胸の中にわいた〈詩〉を眼差しにこめて。なんとさりげなく、なんと自然な共感のかたちであろう。実際の社会の現実は生徒を今後いっそう厳しく襲うだろう。しんどくて、笑顔を続けられないことくらい、教師が一番わかっているのである。だからこそ、人間共感の願いをこめて、しばしいまは〈笑顔を続けていよ〉と書くのである。タイトルの「大寒」がこの終盤の余韻にピリリと合っている。

常套句とも言える冒頭の〈しとしと〉も、次の〈じーんと〉とセットで詩全体における「イ」段の韻の始まりとして生きてくる。口に出して読むと、各行における「イ」段の入れ具合が繊細な詩のリズムを出していて、内容の人間対話を効果的に光らせる岸本さんならではの音律だ。

日常のスケッチがその奥のものを感じさせて、読後に温かいものがそっと残る詩である。

次は二〇〇六年刊行の詩集『さすらい』から「眩惑」という詩を全文引用しよう。

眩　惑

むっつり黙した石に
人はつばきを吐きかけた
石は無表情のまま

路傍の片隅で
じっと夕立を待ったが
きらめく想いはままならず
上下（うえした）の熱気に挟まれて
秘かにあえいでいる
人はそんな石のことなど
見向きもせずに
ふみつけ
けとばしたりして
なお猛暑にかこつけ
自分を見失いながら
さまよっている
夏の午後

夏の午後の石の様子を描いているが、複雑で屈折したものが複眼的に表現されている。〈むっつり黙した石〉には人間の姿も類推されるが、その視点は案外単純ではない。

まず、文字通りの〈石〉の様子の描写としての読み方。悠久の自然が生み出した石という存在がスケッチされ、じっと佇むことを忘れた落ち着かない人間がその石に〈つばきをかけ〉〈見向きもせずに／ふみつけ／けとばしたりして〉いる。そんな人間存在を自然界から見ると、〈自分を見失いながら／さまよっている〉と言えよう。これは文明批評のようでもある。

次に、この〈石〉を不器用でおとなしいタイプの人間の比喩と見る読み方。〈路傍の片隅で／じっと夕立を待ったが／きらめく想いはままならず／上下の熱気に挟まれて／秘かにあえいでいる〉というところなど、悲哀がこもっていてリアルである。何らかの組織で中間的な位置を占める人の苦労までもが連想されて、〈見向きもせずに／ふみつけ／けとばしたり〉されるところのペーソスは、しかし、そのような冷たい仕打ちをする人びとが実は〈猛暑にかこつけ／自分を見失いながら／さまよっている〉にすぎないのだという、弱者の側からの逆転批評へとどんでん返しされるのだ。自分に重ねてある種の痛快さを感じとる読者もいるだろう。

さらには、そのような人の痛みを他者として感じとっ

てしまった人の自己批判的な批評詩とも読める。
あるいは、石も人も、すべてがままならぬ渇いた無常の世に生きているのだという読み方も捨てがたい。
そして、私はいま仮に挙げた四つの読み方を同時に含んだ複眼の詩として、この詩を鑑賞している。まさに、「眩惑」させられる、すぐれて謎めいた作品だが、ポーの詩が好きだという岸本先生のニヤリとした顔が目に浮かぶ。

旅は生きがい

岸本さんの詩には旅先のことを書いた詩が多い。そこには、長く実直に働いてきた人のささやかな楽しみとしての旅の情景が素直な言葉のアルバムに刻印されている。各地を観光する作者のそれぞれの思いは良き大衆性に満ちている。
一九三七年、戦争中に大阪の池田に生まれて以来、現代社会の変遷の中でずっと、大阪、関西で育ち、学び、働き、暮らしてきた作者。日本の演歌などを好み、摂津など大阪の地元の人びとと社会活動に励み、地元の自然風景を愛してきた彼は、文学作品を通して世界の視野も身につけてきた。好奇心旺盛で元気な作者は、耳に聞き、文字で読む全国各地の様子を、あるいは海外の風景をこの目で見ないではすまなかったのだろう。読者は作者といっしょにさまざまな土地をめぐることができる。
その中から一篇、沖縄を訪れた時の詩を全文引用しよう。二〇〇三年に刊行された詩集『釣り橋ゆらり』の中の「平和の丘で」という作品だ。

平和の丘で

風冴えて
哭(な)いている

摩文仁の丘で
平和の礎(いしじ)を巡り
バンザイ岬の断崖
島守の塔を拝んだあと

ひとり広場にきて
この風に気付く

琉球王朝以前から
太平洋戦争末期の破壊
戦後の目覚ましい復興の姿を
ずっと見据えてきた風だ

海から丘へ
丘から空へと
駆け抜けながら
私の心を揺さぶったが
重い問いかけには即答できず
鳥肌の立つおもいをした
二十世紀終わり頃の
一瞬の出来事

この詩には平和の思いが書かれているだけではない。沖縄の苦難の歴史を実感しただけでなく、その現場のただ中で、〈ひとり広場にきて／この風に気付く〉のである。その風は〈海から丘へ／丘から空へと／駆け抜けながら／私の心を揺さぶった〉。つまり、作者は一個の存在全体で、沖縄の〈風〉を感じとるのである。沖縄のすべてが〈風〉となって自分の中に感じられたのだ。それを感じとり、〈重い問いかけには即答できず〉と受けとめた上で、作者は〈鳥肌の立つおもいをした〉と決定的な一行を記すのだ。歴史と自然のすべてを〈風〉として体ごと感じとっている。岸本さんの中の詩人が感じとったものが切実だ。
こうした旅のスケッチの中でも、岸本さんは絶えず人生の思いをめぐらせてきた。それが深くうかがわれる作品を一篇、全文引用しよう。同じ『釣り橋ゆらり』の中の「旅人」という詩だ。

旅　人

遠く遠く

陰惨な道が続いた
人だけが知る孤独な道だ
ふと子供の声がした
ふりむくと
こぶしの花が咲きこぼれ
小鳥がこずえでさえずって
蝶が宙に舞っているではないか
懐かしい少年の頃
友と遊んだふる里の
栗毬の痛さが今にうずき
勇気が出た
また進む
暗い気持は和らいで
木漏れ日のやわらかな林道を
足早に急ぐ旅人の
姿がもう一つ
先に見えた

岸本さんならではの詩だ。旅を人間哲学と結んで発言した先人は古今東西に多い。詩の分野でも、旅のすぐれた詩は古来多く生み出されてきた。その膨大な情報の中に置いても、岸本さんの「旅人」は地味ながらも独自の光を放っていると私は思う。実感がこもっているのだ。

ここに表現されている自伝的でありながら普遍的な人生の思いは起伏に富んでいて、かなしみの中に希望が見えて、多くの人の共感を呼ぶだろう。〈陰惨な道が続〉く歩みは、〈人だけが知る孤独な道だ〉と作者は記す。なるほど、いろいろと考える葦だからこそ、陰惨だ、孤独だと感じられるのであり、それは寂しさと共に奥深さでもあるのだとおしえてくれるようだ。年齢を重ねて迷った時に、ふと思い出す幼児の原点。〈ふと子供の声がした／ふりむくと〉以下、展開される懐かしい情景は、自分自身の過去の映像だろう。そうした郷愁に〈勇気が出た〉という辺りに岸本さんの元気な個性が表れている。そして、〈また進む〉のだ。最後の四行〈木漏れ日のやわらかな林道を／足早に急ぐ旅人の／姿がもう一つ／先に見えた〉はさわやかで味わい深い。これは先人など共に歩む他者とも読めるし、自分自身の明日の姿とも読める。岸本さん自身の人生感慨が切実なので、読んだ人はそれぞれ自分にひきつけて共感しながら普遍的に読めるのだ。

それにしてもこの詩選集でまとめて読むと、岸本さんは旅好きだ。各地の地名がたくさん出てきて、そこにいつも摂津の人・岸本さんがいるのである。その度に、飾らずに律儀に綴っている。彼にとって、きっと、旅は生きがいなのだろう。

旅してはまた帰り、摂津で暮らしてはまた旅する。その一体化した人生という分野こそ、岸本さんの詩世界だろう。歳月の無常を知るからこそ、佇んでは刻む。そんな思いが親しみやすく伝わってくる。

いまの世の中で

二〇〇四年の刊行された詩集『四季巡る』から詩「四季巡る」を全文引用する。

四季巡る

空に山に道の辺に
春夏秋冬の
偽わらざる変り様が
私の気持をせきたてかりたて
年甲斐もなくろうばいさせ
ふと気がつくと
白髪さえ頭にかざし
悠久たる想いはかすんで
空虚なヴェールにつつまれている
名もない花の
純朴可憐な姿に
えも言われぬ安らぎを
感じた日もあった
人さまざまな思惑に
私自身の妄執を重ねて
「お互いの人生だから」
「私だけの人生だから」

と言い争いながら
いたいけな心は
容赦なく
時の流れに翻弄されている

〈容赦なく／時の流れに翻弄されている〉大衆の中の一人と自覚しながら、そのように認識すること自体がすでに批評的内省であり、岸本さんの眼は現実を見つめている。

岸本嘉名男さんは大阪摂津で保護司もしている。他者の人生に関わるデリケートな分野なので、そのことについては多くを語らない彼であるが、岸本さんの詩文学研究・教育、詩団体運営、詩活動の全体から浮かび上がる人格そのものが、そのことをなるほどと思わせる。社会の掟を破って暗い道に入った者が、新たに社会復帰することで人生を好転させていく、その手伝い役とも言える保護司という存在。「教育の現場でずっと働いて地域に少しばかり奉仕してきたから役が回ってきただけなんや」と本人は謙遜するかもしれないが、人びとがこういう役に彼こそふさわしいと判断してきたことに、私は心からうなずくのである。先に引用した詩五篇を読むだけでも、岸本さんの人間の奥行きが伝わってくるだろう。人の心の痛みに敏感なのは、彼が無常の人生を愛し、自然を愛し、文学に通じる複雑な心に敏感でありながら、自ら素朴な大衆の一人であることを前面に出して生きて来た、そんな歩みによるのだろう。

最後に、既刊オリジナル詩集には未収録の本詩選集収録作品から詩「さらに次へと」を全文引用する。

さらに次へと

若さが溢れ活気あるまちがいい
桜町一と二丁目の境を横切る防領川の清いせせらぎに
大きな鮒や鯉、たまには鴨や白鷺が行き来して
春、さくら公園は桜花爛漫、憩い・安らぎの、
あの人、この人、にこやかな語らいの場となる
子等の遊び声も賑やかに弾け、のびやかに

「笑う門には福来たる」さらに次へと

平和で楽しい和のまちがいい
西隣にはのどかな流れの大正川が在り、その手前東側
に
小・中・高・の学び舎が、一直線に並び建つ青空の下(もと)
明日への夢や希望がおのずと湧く文教エリア近くで
子ども会、自治会、老人会の三者がスクラム組めば
オール桜町に満ちる幸せ、家族や近隣の絆も愈々強く
キーワード「温故知新」さらに次へと

美しく住み良いまちがいい
挨拶や会釈を交わし、だれかれとなく
言葉掛け合い、元気を　ギブ　アンド　テイク
ゆとりで助け合う優しさ、苦労を分かち合う朗らかさ
まちのモットーは何だっけ、ああ、いつもの
「ゴミは捨てるより、拾う意識で」だよ
みんなで伝統引き継ぎ、さらに次へと

日本経済が深刻の度を増し、各地の商店街もさびれて地域社会も崩壊し、格差社会の脅威が若者を襲っている今日、若い人たちの人生行路を励まし幸せを心から願う、こんな年配者がまちの身近な地域にいたら、どんなにすてきなことだろう。しかも、その人は素朴な好好爺であるだけでなく、古今東西の詩文学を通じて人の心を見つめて来た、詩の人なのである。

人生を学ぶ初心に帰って、リラックスして、岸本先生といっしょに発音してみようではないか。

〈ギブ　アンド　テイク〉。

そして、この弱肉強食の世の中に、自然体の草の根連帯で立ち向かうのだ。

もろくてせつない人間という存在。無常を感じながら、時代の流れに翻弄されながら、それでも自然を愛し、人を愛し、人生を愛して、うたう心をもって、日々たくましく淡々と生きている。

そんなことを実感させてくれる岸本嘉名男さんの詩選集を、ここにおくる。

穂谷の山里を通して世界を見つめる人

『岸本嘉名男詩選集一三〇篇』に寄せて

鈴木　比佐雄

1

岸本嘉名男さんは、高校教員を続けながら英米文学、フランス文学などヨーロッパ文学の詩人・小説家の原書に当たり、詩論や象徴論の研究をしてきた。しかし関西外語大学穂谷学舎に職場を変えたころから、その穂谷の空間に触発されて詩の実作をするようになった。現在まで初期詩集も入れて八冊を刊行していて、その中から選ばれたものが今回の詩選集となった。また三編の代表的な詩論も収録されている。

岸本さんの詩の魅力は、研究者であるにもかかわらず、てらいのない一人の情感にみちた人間の内面が、その生かされている空間の只中で顕わになってくることだ。例えば二〇〇〇年に刊行された第一詩集『碧空』のなかの「穂谷再訪」を読んでみたい。

穂谷再訪

どうして穂谷が私を惹きつけるのか
九月中旬　小雨まじりの午後
再び訪れてみると
屋根より高い傾斜の小径(こみち)が
見晴らしの良い畦道へとつづく
黄金色(こがねいろ)の稲穂が重そうに滴(しずく)を垂れ
背後の栗イガもたわわにしなり
丘にはミカンの青い実と
まだ色づかない柿の実とがぶら下がる
たしかにここには秋がある
竹林をわけ入ると
突然パーンと音がして
雀おどしの空砲と分かったが
こわごわ歩む
雨はなおしとしと
奥まった薄暗い竹やぶ道を行く

不気味さに一瞬たじろぐが
このほの暗さの感触こそ
穂谷の神髄とでもいうべきか
やがて明るい場所に出て一呼吸
小太りの黄色いヒマワリが
こちらを見て笑っている

雨やんで
ひき返しの竹やぶにも慣れ
あとは「ほたに小径」を気楽に一巡
人の気配こそずうっとしないが
空気は平らかで
まるでタイムスリップした
おとぎの山里を彷徨した心地だった

岸本さんは、英米仏の詩人や萩原朔太郎などを踏まえて韻律論などの詩論を書かれていて古今東西の詩人たちの詩法に通じている。ただ自作の詩法に関しては特に強い影響を与えられている詩人はいないようで独自の詩作を試みている。この詩を読んでいると、例えば宮沢賢治の「心象スケッチ」のように、自分の生きる場所の周辺の山河や山里に憧れ、心惹かれて歩き廻る時空間を正確に記述している。岸本さんの詩には、奇をてらうような仕掛けはなく、ただありのままを記述していくことこそが、自分の詩なのだと語っているようだ。賢治が小岩井牧場を何度も訪れて詩作の源泉としたように、岸本さんも穂谷という山里を自らの詩のイマジネーションの場所と感じているように思えるのだ。竹やぶの道の「ほの暗さの感触」こそが「穂谷の神髄」と語るこの詩は、岸本さんの初期の詩でありながら代表作となるだろう。穂谷の山里に魅せられた岸本さんは、このような環境を与えてくれた全ての存在に感謝を抱いて詩作していることが分かる。詩「唯(ただ)　有難う」を引用してみる。

唯(ただ)　有難う

待ちかねた雪がふり
これで私なりの

「穂谷の四季」が出来上がる
きのうはマイ・カーを自粛したが
今年は噂ほどに積雪もなく
今朝凍てついた道を
定刻どおり愛車で駆ける
研究室から外を見ると
いつのまにか陽が山村に映え
段々畑には白いものは全く見えず
いつものように
穂谷は穏やかそのもの
この恵まれた自然環境のなかで
晩年を過ごせる私は
なんと果報者か

「穂谷の四季」の時間と光景に岸本さんが入り込み、それに馴染んでいき、生かされていく心境を「なんと果報者か」と語っている。現代の文明が四季を感じさせないような電気付けの均一的なライフスタイルこそが、福島原発事故を引き起こした根本的な要因だった。岸本さんは暮らしの中で残されている掛け替えのない四季の時間を取り戻そうとしている。そのためには深く四季の自然と対話し謙虚に学んでいくことが岸本さんの詩の大きなテーマになっているように私には感じられた。

2

二〇〇三年に刊行された第二詩集『釣り橋ゆらり』は、穂谷に分け入るように旅をしながらその場所から語りかけられたことを詩に記している。その場所は、「朝の釧路港」、鯨の見える国後島、賢治の故郷の東北、神奈川の「葉山の海辺」、奥美濃の山里、「雨の白樺湖」、福井の永平寺、宍道湖、ルーツの猪名川流域、沖縄の砂浜などで、その場所に出会った感動を淡々と記している。沖縄の平和の礎のことを書いた詩「平和の丘」を引用する。

平和の丘で

風冴えて
哭いている

摩文仁の丘で
平和の礎を巡り
バンザイ岬の断崖
島守の塔を拝んだあと
ひとり広場にきて
この風に気付く

琉球王朝以前から
太平洋戦争末期の破壊
戦後の目覚ましい復興の姿を
ずっと見据えてきた風だ

海から丘へ
丘から空へと
駆け抜けながら
私の心を揺さぶったが
重い問いかけには即答できず
鳥肌の立つおもいをした

二十世紀終わり頃の
一瞬の出来事

岸本さんは、摩文仁の礎を前にして、「風冴えて／哭いている」と記している。この思いこそが平和を願う日本人の原点だと語っている。その場所の風景には歴史に翻弄された多くの人びとの魂が宿って、そんな見えない民衆の思いを詩に記したいと願っているのだろう。「重い問いかけに即答できず／鳥肌の立つおもいをした」と記す岸本さんは、死んでいった人びとの無念な思いが身体に染み込んでいき、平和の尊さをこの摩文仁の礎の前で噛み締めている。沖縄問題の原点を考える時に、この場所から考えなければならないことを語っている。

二〇〇四年に刊行された第三詩集『四季巡る』は、四季折々の穂谷での学究生活に触れたり、友人・知人の展覧会などの作品を賛美する。また母の死や自分の病気などの生きるものの苦悩を淡々と書き記している。そして自分や他者である生あるものたちの一瞬輝く姿を書き止

めていく。詩「光彩暮色」を引用してみる。

光彩暮色

久し振りの大阪・天王寺公園
右方向スロープを降りて行くと
茶臼山・慶沢園は鬱蒼ともの静か

美術館地下の二科展会場へ
招待状をくれた人の写真を捜す
なんと「大阪市長賞」を貰っているではないか
写真歴十八年と聞くが
よくここまで頑張ってきたものだ

浴衣を着た舞子さんが
所用あって飛び出すシーン
静から生へと弾む世界を
若い動作がかもし出す

館内の閉館アナウンスに
追われるごとく外に出ると
摩訶不思議
金色に輝く小雲群が
目の前にぱっと広がって
慶事を祝うかのように
空と梢の合間を鳩が
飛び交っている

人はそれぞれ
この光景にしばし佇み
驚きや喜びの言葉のあと
三々五々に立ち去って行く

この詩では、長年写真を撮り続けた友人の作品の飛び出して来る舞子さんの姿に感動したことが伝わってくる。「静から生へと弾む世界」を岸本さんは心に刻み詩に転化しようとするのだろう。そんな生き生きした姿を見た後で館内から外に出ると、金色の雲を背景に鳩が梢を飛び跳ねている。この地球という舞台に生あるものは生かされていることに気付かされる。そして互いを褒めたたえながら、いつかみんな別れの日が来るのだと告げている。この君子は水のごとき交わりのような、友とのさりげない交感の後のあっさりとした別れの自然さが、岸本さんの持ち味のように感じられた。

二〇〇五年に刊行された第四詩集『めぐり合い』は、アイルランドや北海道網走など遠くの旅の詩篇、また自然や故郷の詩篇の他に、淡々と人間の内面を曝け出そうとする詩篇もある。「めぐり合い」とは他郷や他者に出会うだけでなく、自己の内面を深く見詰めて、自己とめぐり合うことも語っているのだろう。詩「宇宙」を引用してみる。

宇　宙

広い宇宙に枠はある
だのに人は　自分だけが
いい子になろうと必死に欲張る
季節は同じように巡り来て
豪雨　台風　地震も
繰り返しているというのに
人は何故そんな事には無縁の顔付きで
怒ったり　すねたり　わめいたり
泣いたり　ぐずったりするのか
宇宙の枠は決まっているのに
ああ人は　憎しみ合い
傷つけ　殺し合い
今日も猛暑のせいか
妻でさえ　怒りを押さえ切れずに
なじられ内心じくじたる私だが
よし、ゆっくり話を聞こう
表裏・陰陽相俟って
この世が在ると言われるから

この詩「宇宙」の中で岸本さんは、宇宙には広がりは無限のようだが、本当は枠があり有限であるという。そ

んな有限の世界で生きる自分たち人間が、無限の可能性を追求しようとして、他者よりも偉く見せようとすることなど実に馬鹿げたことだと指摘している。このような考えは宮沢賢治の考えていた「デクノボーの精神」と共通している。天変地異や人災の事故の危険が迫っているのに、お互いちっぽけな自己同士がなじりあっても空しいことだと、妻との夫婦喧嘩と和解を笑い飛ばしながら語っている。このような愛すべき人間たちの小さな存在の生きる姿を、どこか覚めた大きな宇宙の視線で眺めているところが、岸本さんの詩の特長でもある。

3

二〇〇六年に刊行された第五詩集『さすらい』は身体の衰えを自覚しながらも、自己の精神的な原点を甦らせて生き直そうとする思いの詩篇が並んでいる。それらには精神的な若さを取り戻させてくれる衝動がある。詩集のタイトルでもある詩「さすらい」を引用してみる。

さすらい

ひととき
既成自己の解体を
さかんに呼びこんでいた

岸本さんの学究生活のテーマは師から大きな刺激を受けていたことが分かる。専門分野を突き詰めていく時にきっと師からの適切なアドバイスがあったのだろう。「海　山　川　緑葉がおりなす／自然の協奏空間に／生きとし生けるもの達の／歓喜を満身に感じて」という四行に岸本さんが時に自然と一体化してしまう心性の持ち主であることが分かる。その瞬間にドグマに囚われていた「既成自己」の解体まで岸本さんの意識は飛翔する。彼はひとり「さすらい」ながら、初源のまっさらな気持ちに絶えず戻って行こうとしていたのだろう。

二〇〇七年に刊行された第六詩集『見つめつつ』は、大学を定年退職後に岸本さんはどのように生きようとしていたかを自然体で語っている。詩「我をみつめつつ」などを読むと大学を六十七歳で退職した後は、近くの幼稚園・校門前の警備の仕事に就かれたとのことだ。前半を引用してみる。

我を見つめつつ

六十歳、さらに六十五歳の定年を無事終え
希望して再雇用二年延長の後ついに退職
今度は六十七歳半ばからアルバイト
近くの幼稚園・校門前に立った

平日の朝八時に家を出て
正式には九時から二時間半、三時間半と
十月からは水曜のみ二時間半、あとは四時間と
曜日等による三種類の勤務形態で
報酬は従前と雲泥の差となるが
時間給の世界に埋没してみた
戸外で規則正しい生活律を
執れるのが嬉しいからだ

夙川（しゅく）・オアシス道路
かつて師と共に
初めて歩いたこの道が忘れられず
今日も一人で
散策を続けながら
心は妙にときめいて
樹木のにおうが如き精気に
圧倒されそうになる

香櫨園浜から
車の全く通らないこの道を
先程訪れた師との会話で
「よし、あの仕事をやりとげなくては」
はやる思いにかられつつ
海　山　川　緑葉がおりなす
自然の協奏空間に
生きとし生けるもの達の
歓喜を満身に感じて

研修を受けて
五月中旬よりスタートしたが
南からの日射が予想以上にきつく
分厚くて頑丈な制服では
背中の汗が発散せず
気分も重苦しく
体が水分・塩分を欲しがって
多量のお茶を飲み続け
弁当には梅干しや塩コンブを
汗シャツのまま帰宅すると直ぐ
裸になって水を浴び
ぐっすり昼寝をして凌いだ

＊冷風（かぜ）よ吹け　暑さ寒さを　抜きにした
　警備の我に　しばし和（なご）みを
＊襲い来る　熱気を避けて　目を閉じる
　夏本番の　蟬競い鳴き

（「我を見つめつつ」の前半部分）

私はこの詩を読んで岸本さんが苦行僧の様に校門の前に立っている姿を想像し、岸本さんの清清しい生き方に感動を覚える。その時々に自分のできることに誠実に勤めていくことが、生きることだと自ら実践しようとしているからだろう。この詩は秋冬を越えて春になり一年を勤め上げたところで終わる。岸本さんの詩篇は、自分の生きる姿を自問し続けることに力点がありその思いが「我を見つめつつ」という詩集に結実したのだと思う。

二〇〇八年に刊行された第七詩集『早春の詩風』は、四季を求めて日本や海外に旅行したことを記した詩篇や近況を知らせてくれる詩篇などだ。最後に一九九七年刊行の初期詩集『彩雲』から詩「私の冬景色」を引用したい。生活排水やゴミで汚染された川に佇む白さぎの姿に自己を投影する詩だ。岸本さんが生きとし生けるものの全ての存在を受け止めて詩作しようとしていたことが分かる。新しい故郷である穂谷の美しい自然を眺めながらも、都市の中で汚染された場所で生きざるを得ない存在の、生の実相をも見つめていく多彩な詩篇を多くの人たちに読んで欲しいと願っている。

私の冬景色

家の中の小さなあつれきを避け
冬の堤防を歩く

こゝでもゴミ袋がはらわたを出し
背の高い雑草はうすぎたなく枯れて
川にはたった一筋のにごり水
真向いの遮断機の鐘がしばし鳴り続き
右へ灰色の電車が
左へ鉄色の電車と交差

ふと川底に白さぎ一羽たたずみ
首をかしげて孤独をついばむ
私とて同（おんな）じか

また詩の韻律論である〈「詩の音律」考〉は白秋、朔太郎の詩篇を分析し日本語の韻律を解き明かすだけでなく、イェイツの原文から英語詩の韻律分析を、さらにヴェルレーヌのフランス詩の原詩の音楽性の魅力も論じている。英語やフランス語がかなり引用されているが繊細な詩の韻律が丁寧に読み解かれていて、この論考は多くの詩人たちに大きな刺激を与えるに違いない。また二編の萩原朔太郎論も独自な視点から描かれていて、朔太郎の新しい魅力を見出すだろう。これらを読めば岸本さんの詩論の根本的な精神は理解できるだろう。詩人岸本さんの研究者としての労作も合わせて読んで欲しいと願っている。